

殿村遺跡とその時代Ⅵ

—平成27年度発掘報告会・講演会の記録—



2017

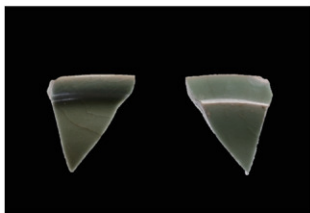
松本市教育委員会



擬漢式鏡「花伎双鳥文鏡」(15世紀)



古瀬戸天目茶碗(14世紀)



青磁盤(13世紀)



7E1 トレンチ全景



炉跡

殿村遺跡 7E1 トレンチの遺構と遺物

目 次

口絵	3
目次	4
例言	4
殿村遺跡第7次発掘調査報告	5
殿村遺跡とその時代—発掘された武家の権威と文化— 国立歴史民俗博物館名誉教授 小野 正敏	13

例 言

- 1 本書は、松本市教育委員会が主催し、平成28年3月26日（土）にピナスホール（松本市役所四賀支所1階）で行った「殿村遺跡とその時代VI～平成27年度発掘報告会・講演会～」の内容を収録したものである。
- 2 本文は、松本市教育委員会が録音したものを文章化し、発表者が加筆・修正を加えた。
- 3 挿図は、当日の配布資料、スライドから再構成し、発表者の指示の下、必要により加除した。
- 4 本書の編集は、文化財課史跡整備担当が以下の作業分担で行った。
文字起こし：栗田 愛・宮島義和、挿図・本文編集（DTP）：栗田 愛

きのあるものだったのですけれども、更地になったことで、私たちの調査の一環としてこの場所がいつ成立したかということを知るために、今年度はここを発掘させていただきました。それともう1カ所ですが、1次調査地点の最初の発掘で見つかった石積みのある平場跡の外縁部の様子をもう少し追求するため、平場跡の南西部分を対象に調査しました。従って今年度は2カ所、長安寺本堂跡の地点を7E1トレンチ、1次調査地点の側を7A1トレンチとして発掘に臨みました。そこで今日は、大きな成果のあった長安寺の方、7E1トレンチを中心に話を進めたいと思います。

長安寺と会田の歴史

最初に長安寺とはどんなお寺なのか。鷲峯山長安寺じゆうぼうといます。或いは太平山長安寺という山号も残っています。お寺に伝わる古い記録はありませんが、寺伝では弘安元年（1278）、つまり鎌倉時代の後期に中国からの渡来僧である大覚禪師だいかくぜんじ（蘭溪道隆）が臨済宗の寺院として開山したとされています。大覚禪師は鎌倉五山の一つとして有名な建長寺にいた臨済宗の高僧として知られていますが、長安寺はおそらく会田氏の主導で招へい開山だったのではないかと思います。この時期、大覚禪師は各地のお寺で開山者になっています。そして大覚禪師に因むものとして、禪師の頂相像と言われる木像が長安寺に伝わっています（図2）。『四賀の社寺文化財』にも詳しく解説が出ています。ちなみにこの像は現在支所旧村長室に寄託保管されています。数年前に修理をされ、室町時代前半の作とされています。



図2 伝大覚禪師像

それから、長安寺にはもうひとつ別の姿があります。臨済宗といえどももちろん禅宗ですが、実はこの長安寺の本尊は虚空蔵菩薩です。そして四賀地区の皆さんにはおなじみの地域の象徴、虚空蔵山の山頂直下に岩屋神社があります（図3）。神社といってもここには神様とともに虚空蔵菩薩が安置されていて、昔ながらの神仏習合した姿が変わらず続いているのです。そして、長安寺の奥の院が岩屋神社という関係になっています。それから、ここは山自体が非常に均整のとれた美しい形の独立峰で、山頂近くは岩屋神社のように磐座を彫掘する険しい巨岩がむき出しになっています。こうした山の姿から、元々虚空蔵山自体が古代に信仰の対象として始まり、そこに修験道や仏教が入ってきて山中に信仰や修行の拠点が出来たと理解しているのですが、そのような流れの中で、やがて山麓一帯にも長安寺をはじめとしたいくつかのお寺が生まれ、とりわけ長安寺の場合は山頂近くの岩屋神社と密接な関係を持ってこれまで歩んできたということが分かってきました。中世の長安寺については、天正9年（1582）に書かれた『御蔵いくばり日記』という地元堀内家に伝わる古文書にその名前が登場します（図4）。従って、少なくとも天正9年の段階には確実に存在していたということがここから読み取れます。ところが、翌天正10年というのは皆さん今年の大河ドラマでご存じだと思いますが、その年3月に武田勝頼が亡くなりますね、そして6月には本能寺の変が起きて織田信長が亡くなります。この事件によって武田氏の領国であった甲斐や信濃の地は非常に政情が荒れたのですけれども、その中で松本には小笠原貞慶が帰還します。そし



図3 岩屋神社

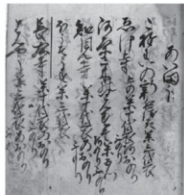


図4 『御蔵いくばり日記』に記された長安寺



図5 『信濃宝鑑』に見る長安寺



図6 解体前の長安寺本堂



図7 田の神(左)と牛王宝印の版木(右)

て11月には上杉方に下った会田氏を攻め滅亡に追い込んでしまいます。それとともに長安寺も戦火に遭って一気に衰退してしまっただけにお寺に伝わっています。『御蔵いくばり日記』はまさにその1年前の記録となるのですが、会田氏滅亡で衰退した長安寺はその後時を経て、江戸時代の寛文10年(1670)に現在の地に規模を大きく縮小して再興したと伝わっています。もともと大きな伽藍があった時には、私たちが1次調査以来発掘してきた旧会田中学校校庭のところで、あそこはかなり大きなお堂を伴う伽藍があったのだとお寺に伝わっています。そして会田氏滅亡とともに衰退した後再興した時、現在の地に移ったのだと聞き及んでおります。そこで私たちは本堂跡の発掘をしたのですけれども、果たしてここが江戸時代になってから開かれたとこなのか、それとも中世の頃から何かしらの施設があったのか、それを調べるために今回発掘調査させていただいたというところです。

もうひとつ見えてきます。図5は明治時代の銅版画である『信濃宝鑑』です。そこに在りし日の長安寺の姿が描かれています。この茅葺の本堂が3年前に解体された本堂の建物そのものです(図6)。このお堂は恐らく江戸時代までさかのぼると思われるのですが、それを調べる間もなく解体されてしまったことは大変残念でした。ところで長安寺は代々檀家を持たないお寺で、信徒だけで成り立っていたということです。このお寺の主たる収入は祈禱だったと聞いています。檀家を持たないですからお寺の経営がだんだんと厳しくなり、明治以降寺地を徐々に手放していつ今日のような姿になったものと、寺に残された記録からうかがうことができました。このお寺で最も知られているものは、春に田の神様を地域の信徒に配っていたということです。この田の神ですが、松本市立博物館に所蔵されている重要有形文化財の民間信仰コレクションの中に1束入っています。2本の草に牛王宝印という護符をお米と一緒に巻き付けて、田の水口を立てて虫除けとか風除けとして使われていたそうです(図7)。この田の神様を地域に配ることで細々とお寺をやりくりしていたと聞いております。その起源がいつまでさかのぼるのか、まったく記録がなくて分かりません。

長安寺本堂跡の発掘

長安寺の話はここまでにして、次に発掘の話に移ります。長安寺本堂跡のある場所、すなわち今回発掘した地点は、虚空蔵山から長く延びてきた尾根の末端にあります。そこに尾根の上にある会田中学校の現在の校庭に向かって小さな谷があるので、その谷口の猫の顔のように狭い場所を切り開いて平場が造られています。この平場は高台にあり、南に見下ろす会田宿に向かって真っすぐ参道が伸びている。非常に見晴らしのいい場所に位置しているということが分かります。平場の幅は30m程度、奥行きも15mほどしかなく、今まで調査してきたものの中では最も狭い平場と言えるのですが、わざわざこのような場所を選んで背後の土を切り取り、前方に盛土して平場を造っているのです。そして今回の発掘によって平場上から中世にさかの



図8 7E1トレンチ全景

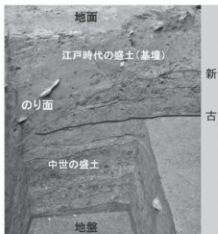


図9 盛り土と地面の様子



図10 礎石建物



図11 柱穴群

ほる数多くの遺構や遺物が出てきたのです(図8)。それによって、本堂跡の場所は既に中世には造成が行われ、平場が存在していたことが明らかになったのです。平場の造成は、いわば現在の宅地造成と同じ工法なのですが、当時はそれをすべて人力作業で行ったのです。発掘は、最初に解体されたお堂が建っていた地面、おそらく江戸時代にお堂を建てたときに盛り土をして整えた地面を掘り下げるところから始めました。そうすると、20～30cmほど掘り下げたところで中世の造成に伴う盛土が現れました。しかし、残念ながらその盛土は近世のお堂を造る時の整地作業や3年前の本堂解体工事の影響で大きく攪乱されてしまい、建物跡などが存在したであろう地面はまったく残っていませんでした。そこで、この盛土をさらに掘り下げたところ、もうひとつの地面が現れたのです。従って、中世の造成面は上下2面の構造になっていたということです(図9)。これは、古い面を改めて新しい面を作っているということで、中世のなかでも2つの時期が存在するというを示しています。この下層の古い地面を部分的に断ち割って下の様子をさぐったところ、元々の地盤から60cmほど黄色と黒色の土を交互に丁寧に叩きしめながら積み重ねて造成をしていることが分かりました。ちなみに古い段階の面は14世紀の後半から15世紀はじめ頃のものともみえています。また上層の新しい面はそれに続く15世紀代ともみえています。先ほども言ったように、上層の面は後世の破壊が著しく、後で説明する池の遺構以外ほとんど捉えることができませんでした。そこで、今回の調査は第2面を中心に進めることになりました。

次に第2面で見つかった遺構についてお話しします。まずは建物の礎石です。平場のちょうど中央やや奥寄りのところから大きな礎石が2個出てきました(図10)。両者は6尺すなわち1.8mの間隔で東西に並んでいます。他に対応する礎石が見つからなかったため、建物の全形が分かりません。しかし石の形状や据え方から建物の礎石と見て間違いなさだろうと考えています。従って、平場の中央に礎石建物が1棟あったことを示しているのだと理解されます。そして礎石の周囲からは柱穴もたくさん出てきました(図11)。これもなかなか四角く並ばないのですが、掘立柱の建物や櫓のような地面に直接柱を立てる構築物もあったということが分かりました。柱穴のなかには礎盤という柱受けの石があるものや埋め土に柱の痕跡、だいたい直径10cm前後、おそらく3寸とか4寸そのくらいの太さの柱と思われませんが、柱痕を持つものが見られました。

そして、礎石建ちや掘立柱の建物の手前から炉の跡が何方所か見つかりました。一つは60cmほどの楕円形で、深さ10cm程度の掘り込みがあり、内部は真っ赤に焼けて埋め土には炭がたくさん混じっていました(図12)。この炭を年代測定した結果1351年～1390年と

いう推定年代が示されました。これは2面を中心に出土する遺物の年代とほぼ重なります。見つかった炉跡はこのような掘り込みを有するものだけでなく、ただ地面で焼けているだけのものもあり、さらに炉の脇に炭の集積が見られる場所が2カ所あります。

このような遺構が平場のなかでどのような配置になっているのか整理すると、だいたい建物は平場の奥寄りである北側にあって、その手前には炉があります。さらに南側はほとんど何もない広場のような空間を経て平場の縁取りである急角度の土手に至る構造を見て取ることができます。

そして、2面の調査を進めていくうちに、平場の西寄りから池の跡と思われる遺構が出てきました(図13)。その周辺は礎石建物や炉のある2面より少し地面が高く、トレンチの壁面に現れた地層を丹念に追ってくと上の面、つまり時期の新しい第1面に伴うものであることが分かりました。ちなみに池の埋め土に含まれていた炭の年代測定をしたところ、14世紀末から15世紀の初め頃の年代を示しました。また陶磁器の年代も15世紀前半を示しています。先ほどの第2面は14世紀後半頃でしたので、それに続く時期であることが分かります。次いで池の範囲は発掘範囲で南北7m、東西3mほどです。西から南側がアスファルト道路になっているため発掘できず、全体の形はよく分かりません。縁取りの分かる北側や東側は所々石積みや石列を取り巻かせて、それが直線的になるところもあれば入り組んでいるところもあり、複雑な形をしています。柔らかな堆積岩の岩盤を30~40cmほど掘り込んでおり、平らな底面には砂岩の縞目があらわになっています。岸を入り組ませ、護岸に複雑に石を組んでいることから、おそらく庭園に伴う池と見ておきたいと思います。殿村遺跡では庭園やそれに伴う池に関わる遺構は今回初めてとなります。この池は調査の過程で2段階に変遷をしていることが分かりました。最初の池は縞目の美しい岩盤を底にした段階で、その後外周を中心に埋め立てをして、いわば上げ底をした新しい段階の池に造り替えられます。池の北辺には黒色の玉石敷きが施された部分があるのですが(図14)、これは新段階に伴うものです。ところでこの池は水を湛えていたのでしょうか。そこで池の底に堆積した土を調査指導委員の辻誠一郎先生に見ていただいたところ、水が大量に流れている訳ではないが、水田のように水のある穏やかな環境下で堆積した土であろうとの見解を示していただきました。そこでさらに土の分析、特に珪藻と呼ばれる藻の一種の含有を調べたのですが、結果としてはあまり珪藻が含まれておらず、湿った環境ではあったが水を湛えていた状況はあまり見られないとの結果が出ました。検出された遺構のあり方を観察すると、北側から水を取り込んで南側へ流していく池泉式の庭池に近い姿がイメージされるのですが、初めから水がないということになると枯山水になってしまいます。しかし構造的には枯山水とは異なりますので、実際どのような使われ方がなされていたのか、これから検討が必要ということになります。

さて、この池の遺構では注目すべき発見がありました。池の南よりの岸近

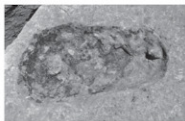


図12 炉跡



図13 池跡



図14 池底に敷かれた玉石



図15 青銅鏡の出土状況



図16 出土した擬漢式鏡

く、古い段階の底に溜まった泥の中から青銅製の鏡が見つかったのです。しかも、姿を映す鏡の表面を下に向けて、平らに置かれていました（図15）。見つかった時、何か容器に入っていた可能性はないか、また周囲に何らかの施設があるのか注意を向けたのですが、結論としては裸のまま池の底に意図的に置かれたのだらうと見ています。池の中に鏡を置くというと、たとえば山形県の羽黒山出羽神社の御手洗池などを男唄します。この池は鏡池とも言い、元々は池そのものがご神体として信仰の対象となり、奉納された鏡が分かっているだけでも600面以上中から見つかったのです。ご神体である池に鏡を奉納するという宗教的な行為ですが、こうした事例を参考してみると、殿村遺跡の鏡も池に捨てられたとかいった単純なものではなく、意図的な納鏡とみていいのではと想像を膨らませているところです。この鏡は、平安時代以降に成立する和鏡の一種で、特に室町時代、14世紀以降に流行する擬漢式鏡という種類の鏡であることが分かりました（図16）。擬漢式と書いてあるとおり、古い中国の漢の時代の鏡に由来する文様を、鏡の外周の文様に取り入れながら、全体としてはこの中に日本的な風景画が非常に繊細な彫り物で描かれています。そして真ん中には亀形の鈕が付けられています。これを鏡の専門の先生に見ていただいたところ、14世紀の後半から15世紀にかけて流行するものだろうとのこと。展示した実物をご覧いただくと分かるように、池の中にあつたためか劣化が進行し、表面には土中の鉄分が錆となって付着しています。これから錆を除去したり劣化の進行を止める保存処理をする計画ですので、それによって図柄の全体像が浮かび上がることになると思いますが、おそらく水辺や流水の表現があって鳥が2羽飛んでいるのではないかと推測をしています。

鏡の話はこれで終わりにして、次に出土した焼物の話に移ります。まず、今回調査した7E1地点では、他の地点と違って地元産の鍋や皿など生活用具がほとんど出土せず、瀬戸産の天目茶碗や中国産の青磁ばかりが目立って見つかりました。とりわけ主体となるのは茶道具です。まず瀬戸産の大海茶入や天目茶碗があります（図17）。これらは古いものでは14世紀代までさかのぼりますので、先ほどの2面の炉の炭の年代測定と合ってきます。天目茶碗の中には、底に「三」と墨書してあるものもありました（図18）。こうした茶道具ですが、同時期の14世紀に描かれた藤村絵詞という絵巻物、京都の本願寺の2世の伝記ですが、その場面のいくつかに天目茶碗や茶入れ、あるいは今回は出土していませんが、茶釜や風炉が描かれていて、当時のお寺における茶道具の使われ方がよく分かります。このように茶道具、とりわけ中国産の高級品や風炉などは有力な武家の居館跡や寺院跡からしか見つからず、有力者の必需品として使われていたことが分か



図17 大海茶入(左)と天目茶碗(右)



図18 「三」の墨書



図19 硯

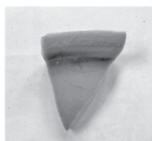


図20 青磁盤



図21 スタンプ文で飾られた火鉢

るのですが、そうした茶を嗜む人びとがここで活動していたということを示しています。それから石製の碗が5点ほど見つかっています。いずれも破片なのですが、1点は当時のブランドである京都の鳴滝石という石材を使っている可能性があります(図19)。先ほどの絵巻物でも僧が文字を書いている風景が見られ、よく見ると碗も描かれています。実際に書かれた文字資料は、これまでの発掘を通して3点くらいしかないのですが、先ほどの天目茶碗の底に書かれた「三」の墨書はまさにその貴重な一つです。この場所で字を書く人が活動していたことが遺物から分かるのです。

次に中国産の青磁です。今回の調査でもいくつか出土していますが、特に今回は青磁の盤(皿)が目につきます(図20)。これまで出土している青磁の中でも非常に焼きがよくて、質・発色ともに素晴らしいものです。全体が残っているとすると、身の深い皿になると思うのですが、おそらく実用というより鑑賞するものとして座敷飾りに使われたのではないかと思います。青磁は他に香炉の破片が見つかっています。

遺物の最後は瓦器を紹介します。これは瓦のような質の焼物ですが、おそらく火鉢として使われたもので、先ほどの絵巻物にも類似したものが登場します。器の表面は丸い貼り付けの連続文様や花卉のスタンプ文で埋め尽くしています(図21)。

以上が長安寺本堂跡における発掘調査成果のあらましですが、最後に少しまとめをしておきたいと思います。まず今回発掘した平場の造成ですが、これまで殿村で私たちが発掘してきた平場跡の中では最も古い14世紀代まで遡るということ、しかも庭池を伴う建物があった場所だということです。現地を視察した調査指導委員会先生方からは、庭池とお堂からなる空間だったのではないかという意見が出されました。最初、近世になってからこの場所が開かれ一堂が建てられたと想定していたのですが、その想定は覆され、一気に中世、しかも平場群の中では最も古い14世紀まで遡ることが明らかになったことは、殿村遺跡全体を考えると非常に大きな発見と言えます。そして、天正9年の文書に登場する中世の長安寺のかつての姿を私たちは発掘している可能性が高まったのではないかというふうに考えています。とりわけ今回の調査地点は奥の院のある虚空蔵山から真っ直ぐに伸びてきた尾根の先端部にあたり、山と直接的につながる位置にあるということです(図22)。ここからはかなり想像が入りますが、寺伝によると中世に会田氏が隆盛した時期には大きな伽藍があったのかもしれませんが、そうした中でも今回掘った場所というのは虚空蔵山との関係の中で、一番大事な空間だったと言えるのではないとも思うのです。殿村遺跡のどの場所よりも、ここに立つと背後で直接虚空蔵山につながり、しかも眺望のいい高台になりますので、そうした環境の中でこの場の性格を考えていかななくてはならないと考えています。

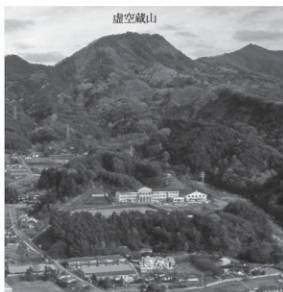


図22 虚空蔵山と長安寺

発掘された城館や寺の池

最後に、参考として池庭を伴う各地の遺跡を紹介します。まず広島県の万徳院というお寺の跡です。場所は北広島町という内陸部の山間ですが、谷の最奥部に正面に立派な石垣を構えた平場を造成し、向かって左手に庭池を構え、中央には大きな礎石建ちのお堂があります。さらに右手から奥側には庫裏などの建物が続きます(図23)。平場の前面に石垣が構える造成の仕方は、殿村とちょっと似ていますが、時代的には戦国末期、有名な吉川氏キチカウヂが造ったお寺です。これに関連して近くにある吉川元春の館ですが、やはり壮大な石垣

を構えた平場からなる館の一角に武士の威信を示す装置として池を伴う庭園が造られています(図24)。次に愛知県のお寺に伴う池ですが、豊橋市にある普門寺というお寺の背後の斜面、道筋に数多くの平場跡が連なった最上部に本堂跡のある平場があり、その脇に石垣で護岸された池が残っています(図25)。ここからさらに浜名湖寄りの静岡県湖西市には大知波峠廃寺という古代にさかのぼる山のお寺の遺跡があります。浜名湖を見下ろすとても眺望のいいところですが、寺院の一角に信仰に直結する湧水を伴う池やすく横そり立つ大きな磐座があります(図26)。この池の周辺からは墨書をされた土器が大量に出土し、さかんにお祭りが行われたようです。次は福井県の一乗谷朝倉氏遺跡にある朝倉義景の館の中にある庭池で背後の斜面から巧みに水を取り入れている様子が見られます(図27)。同じく武家の居館として有名な飛騨の江馬氏館では、庭池を鑑賞しながら客をもてなす会所と呼ばれる建物が復元されています(図28)。同じく武家の居館に伴う池に滋賀県米原市の京極氏館跡があります。池自体はほとんど埋まってしまっているのですが、周囲の景石が地表にそそり立っています(図29)。最後に地元長野県の例ですが、中野市の高梨氏館跡を紹介します。ここでも堀で囲まれた方形の館の一角に庭池が造られていて立派な景石が置かれています(図30)。現在は史跡公園として整備されていますので、ぜひご覧いただきたいと思います。以上、お寺や武家の館に見られる池を参考として紹介しました。

これで昨年度の調査報告についての話を終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



図23 万徳院の庭池



図24 吉川元春館の庭池



図25 普門寺旧境内の庭池



図26 大知波峠廃寺の池



図27 朝倉義景館の庭池と建物跡



図28 江馬氏館跡の庭池と会所



図29 京極氏館跡の庭池



図30 高梨氏館跡の庭池



殿村遺跡とその時代—発掘された武家の権威と文化—

国立歴史民俗博物館名誉教授 小野 正敏

はじめに—中世考古学と城館研究

先ほど竹原さんの方から話が出ていた中にいくつかの遺跡がでてきていますが、今日の話で使わせていただく遺跡は、この図1の中で大きな字で書かれている所です。一つは福井県・朝倉館、それから西の山口県・大内館、それから大分県の大友館、そして東では神奈川県小田原城というのがあります、それからもちろん長野県の高梨館、そして今松本で発掘中の井川城。それから東北の方に行きますと福島県伊達市の梁川城、それから青森県八戸市の南部氏の本拠地の根城という城があります。これらが話に出てくる遺跡ですので地図の上で確認頂ければと思います(図1)。

最初に中世考古学の話をしたいのですが、これをきちんと話しますと時間が足りなくなりますので、簡単に今日の話に引き寄せて話します。ちょうど昭和30年代の終わりから40年代にかけて、私が大学に入りましたのも41年です、ちょうどその頃に重要な中世に関する遺跡二つが発掘されました。その一つがこのスライドの草戸千軒町という広島県の瀬戸内海に面した港町の遺跡です。それから少し遅れて一乗谷という福井県の戦国城下町が発掘されます。紹介にありましたように、私が大学を出てから、しばらくしてこの一乗谷を調査するための研究所ができてそこに呼ばれて仕事をしたのが初めての中世遺跡を掘る経験になりました。

私はこの二つの遺跡の調査研究が学史のエポックである意識して、日本の中世考古学はここから始まったという言い方をしています。どういう意味かといいますと、もちろんこれ以前にも「中世という時代」に関係した遺跡の発掘というのはかなりあったのです。例えば焼物の窯跡が掘られていたり、あるいは山城、お城の一部が、あるいは寺院が発掘されていたり、いわば中世社会のパーツが掘られていたということはあったわけです。ただ、その時代の、最も普通に多くの色々な人たちが集まって生活をしている、ある意味その時代を代表する生活の場としての町だとか都市というものを掘ったのは実はここが初めてだった、と。そういう場所を掘ることによってはじめて遺構、遺物の研究という考古学的方法によって、中世という時代を語る事ができる。中世の時代の遺跡を掘るから中世考古学、ではなくて考古学という方法、遺跡や遺物から中世というものがどういうものだったのか、これを語る事が中世考古学だと私は思っております。そういうふうにと考えると、中世という時代を特徴づける町や都市、時代を語る多様な階層、職



図1 城館と庭園

業の人びとが普通に生活した遺跡、その始まりである草戸千軒町と一乗谷から日本の中世考古学は始まったのだ、という言い方になります。草戸千軒町は港町ですし、一乗谷は城下町です。昔、お城を掘る、あるいは館を掘る、と言いますと、権力者の住んでいた居住地を掘る。寺院を掘るといってお寺だけを掘る。それで終わっていました。さらに言えばそうした城や館、寺院さえも全体を発掘したことがなかったのです。ちょうど現在の東京で皇居と東京駅と浅草の浅草寺を掘って、それを見せて「これが東京だ。」と紹介するのと全く同じだと思うのです。人々が普通に生活している下町やオフィス街、新宿、渋谷などの商業地、そういった所を見せないで東京が何たるものか語れないのではないかと、そういう思いが先ほどの見方に繋がってくるということです。

そして、この頃から城や館の研究の方向性も大分変わってきました。それ以前は発掘をしないで山城を調査する、皆さんも聞いたことがあると思いますが、城の調査と言えば縄張り調査という時代がありました。現在の地表に残されている地形から堀がどうあったか、あるいは曲輪と呼ぶ平坦な部分がどのようにして造られているか、敵から攻められた時防衛のための堀や土塁はどのように構築されて、城の出入り口はどのような形をしているか、そういう縄張り研究を中心にやっていました。これはこれで大変大きな仕事でした。やはり、城の機能のひとつは当時の権力の拠点をどう守っていくか、戦いという場面と切っても切り離せない、そういう空間だったわけですから。そして、そのような城が地域のなかにどのようにあるのか、そこから権力や領国構造を考えていこうとしたのです。そういう意味での調査としては縄張り研究の有効性はありましたし、大きな足跡を残したと理解しています。なによりも発掘しないでできることでした。

一方、考えてみると戦国時代と言われている時代においても戦いがあったというのは実は限られた時間的なものなのです。いつも戦いがずっと続く状況ではなく、城や館というのは戦闘に備えるだけの機能だけではなかった、むしろ平和な時、平時に政治的、経済的、あるいは文化的な拠点としての機能を大きく持っていたというように理解しています。もともと城の主人である権力にとっても戦うことに目的があるのではなく、自らの政治権力を守り、拡張するために武力が行使されたのですから。そういうことを考えるのには先ほど言いましたように、戦闘や防衛を意識した縄張りだけを考えていても見えてこないということになります。発掘調査によって、城の空間の中にどんな遺構があり、どんな機能が読み取れるのかを考えます。そこにどのように権力が反映され、どんな生活や儀礼、行事があったのかということになります。そのためには、遺構だけではなく、そこでどのようなモノが使われていたのか、遺物からの研究も重要になります。

遺跡からの出土品、例えばもっとも多く得られる陶磁器についても、研究のありかたがずいぶん変わりました。私が言っている40年代以前の陶磁器の研究というのは、どこでいつ作られたものかが問題でした。例えばある焼き物の破片が出てきます。「これは愛知県の瀬戸で13世紀頃に作られた天目茶碗です。」というので大体話が終わってしまいます。それがその場所ですべてにに使われたのか、どういう他の焼き物と一緒に使われているのか、そこからどういうことが語れるのか、そういう研究に進展しなかったのです。もちろんその背景には研究史的な段階もありました。その頃はまだどこで生産されたかさえ不明な焼き物もあったのです。発掘をして様々なものが遺構と一緒に出てくる、その中から焼き物が何を語ってくれるのかということに深く入っていく。城館の研究も変わったし、それから焼き物の研究も変わったし、その中で今日お話しするような考古学からは語ることがなかなか難しい文化とか、あるいは権力の問題というものも、そういう場とモノという考古の材料から語れるようになってきた、これが私は中世考古学ということの一つの大きな発展であったと思っています。もちろん今日お話しするのがその全てではなくて、もっともって様々なテーマがありますので、今日はまさにこういった城・館というものに限って話すということが前提となります。それでは先へいきたいと思います。

権威の象徴としての城館—井川城と高梨館

これは先ほどお話をいたしました、松本市で現在掘っています井川城という城です(図2)。皆さんご存知のようにと言いますか、私みたいなよそ者が言うよりも地元の歴史ですからよっぽどご存知だと思います。井川城は当時信濃国の守護でありました小笠原氏の居館だというふう言われて調査されている所です。まだ調査がそれほど進んでいないのですが、こういう図をいただきました。ちょうどこちら側が100m位でしょうか、こちら側は70m位でしょうか。川の流れて挟まれた形で、長方形に盛り土をした館の跡が残っている、とそういう話です。そして、現在はあまりはっきりと形が見えませんが、発掘をしてみますとこのような堀跡が検出されるということです。こちら側に分流して川になっている部分と、こちらの細い流れとなっている部分が堀で、そのなかに長方形の台地の部分、館が囲われていたらしい、というふう言えます。また今は地上に痕跡を残しません、方形の台地の周辺部には別の盛り

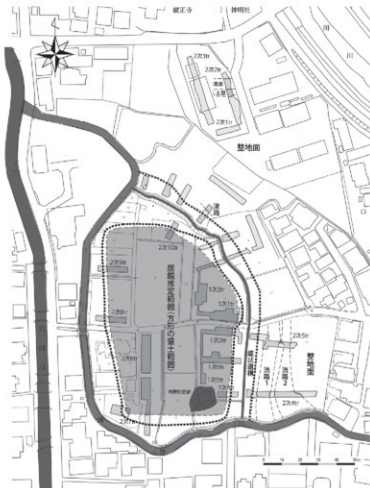


図2 井川城模式図

土があるそうですから、堀の内側には土塁があったようです。館内の発掘では礎石建物などが確認されたのですが、残念なことにその部分がありよく残っていませんので、遺構からはあまり多くのことを語ることはできません。概要としては、この館が長方形をしていて、堀と土塁で囲まれていたらしい、後で流れによって崩されていく、本来は多分こういう長方形だったというのが特徴です。もう一つはここで礎石の建物群が確認されているということです。それからさらに後でまた紹介しますが、私が誠信財と言っているような通常の館の主人レベルではあまり持っていないような高級な焼物を持っているということです。

他にもっと話を発展できるとよかったです、この発掘情報だけではちょっと難しいので、他の遺跡を参考にしながらお話をします。この写真は先ほど竹原さんの話にも出てきました、中野市にあります高梨館です。今日の話で井川城と比較するとき、適切なのはおそらくこの高梨館だろうと思います。高梨氏は北信濃で権力を持っていた国人領主で、地方の領主層ですが、小笠原氏が守護になって国内で盛んに合戦があった頃、例えば1400年の小笠原長秀の信濃守護をめぐる大塔合戦の時には、反守護勢力として村上氏や海野氏、諏訪氏など同じ国人領主たちと結束して対小笠原勢として力を発揮していました。そういう地方武士の拠点の発掘例が高梨館なのです。

高梨館(図3)も井川城と同じように館の形が長方形をしていて外側に堀がまわっています。そして中側には土塁がまわっています。東西が約130m、南北が約100mです。東が図の上です。西側にある二つの門の南側が表門で、東方の山の上の鴨ヶ嶽城を向いた東門が裏門です。館の中側にはたくさんの礎石建物があって、東南隅には土塁をバックにして大きな池庭があるという形になります(写真1)。これらの建物の機能についてはまた後ほど詳しくお話ししたいと思います、池に面した大きな建物がこの時代に会所と呼

ばれている建物で、池庭とセットになって連歌、花、香、茶の湯などの遊興的な集まりの時にお客さんをもてなすための空間でした。滝も見えています。庭はこの建物から鑑賞するように造られています。こうした高梨氏が持っている館の空間構造、これは実は戦国期、もうちょっと前、15世紀半ばくらいから戦国期にかけて各地の領主層、あるいはもうちょっと上の大名クラスの権力者たちが持っていた館の一つの典型的なスタイルを示しているといえます。確認しておきますと、一つは方形であること、それから庭園、特に池を持っている庭、池庭があること、それから礎石立ちの建物があること。これらが重要な標識となります。それから後でまた話をしますが、この高梨館でもたくさん私の言う「威信財」が出土しています。それらには中国製の青磁大皿、酒海壺と呼ぶ青磁の広口壺、青磁花生、青磁の太鼓胴の水盤のようなものが複数個確認されます。威信財といいますのは中国製、あるいは瀬戸焼など的高级な焼き物の一群で、特にお客さんを迎えて儀礼や儀式の場となる座敷を飾ったりするときの室礼の道具、また茶の湯をしたり、香を炊いたり、花を生けたり、そういった様々な場面で使われたその場の行事や儀式の空間を荘厳するための道具で、それを持っていることによってその持ち主の権威を見せびらかすものです。当時流行のものが1セット、出土しているのです。高梨館が持っている情報の意味というのはまさに全国レベルの高いものであって、今言いましたようないくつかの点で館景観や威信財などが全国的な共通した様相を示しているということが特徴です。ただ注意が必要なのは、これら威信財とした陶磁器群は火災にあっているのですが、厳密にいうと陶磁器の年代は15世紀後半のものであり、館の主人がまだ中野氏であった時代のものと言えることです。

大名館の空間構造

今見てきたような方形の館、礎石立ち建物、そして池庭を持っている、そういう武家の館が最初に明確に掘られたのが先ほど紹介しました、福井県一乗谷の戦国大名朝倉氏の館だったので(図4)。この山裾の所に堀と土塁で区画された、約100m位の館が発掘されました。西の門が表門で、内部には15、6棟の礎石立ち建物があり、そして一番奥の山裾に池庭が発掘されました。館全体は、立体復元してみるとこんな景観になります。西側に表門があり、入ると広場があって、正面に主殿とよぶ大きな建物があり、花壇がある中庭をはさんで向かい側にこの館で最大の常御殿、これが会所を兼ねた建物でした。そして、一番奥の池庭とセットになっている小座敷が茶室、隣が泉殿です。これがお客さんを迎えて色々な行事や儀式をするための「ハレ」の空間の主な施設でした。一方、その北側の方を見ますと、ここには大きな囲炉裏を持っている建物、つまり台所ですね、また高くなった基礎を持っている土蔵のようなものがありましたし、裏門から入るとすぐの所に厩が建っている。これらが館の裏方の機能や日常生活を支えた「ケ」の空間の主要施設です。

この館は、建物が焼け落ちてすっかり残ってありません(写真1)。もちろん上は全部焼けているのですが、礎石が全部残ってあります。この遺跡は、天正元年(1573)に織田信長軍の攻撃を受けて三日三晩焼けて滅んだと記録されているように、ある時間断面でその遺跡の内容がタイムカプセルとして残されたことが重要な点です。もちろん陶磁器もたくさん出土しています。もう一つは、ここで朝倉氏が滅ぶ直前、後に最後の室町将軍となる足利義昭が都を追われて越前へ逃げて来て、そして半年ほど一乗谷に滞在をしているのです。その後、どうも朝倉氏は私を立てて都に上がってくれそうにないということで信長の誘いを受けて京都に行ってしまいます。そして朝倉氏は滅んでいくというそういう歴史を辿っています。一乗谷では、義昭は上城戸の外に造られた御所に滞在し、朝倉館に御成という形で訪問をします。また義昭はこの朝倉館で元服もしています。そうしますと、将軍御成としてその訪問の記録がかなり克明に残されます。その結果、遺構が良く保存されているという考古学的な成果と、文字史料に記された記録、この両方が一つの館空間に重ねることができる。私たちはこれを使うことによって当時の館の中の構造、建物群や庭園がどこにある、そ

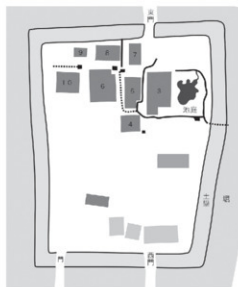


図3 高梨館模式図



図4 朝倉館模式図



写真1 高梨館の庭園



写真2 朝倉館の庭園と中庭をめぐる

表1 将軍御成プログラム

	朝倉館御成永禄11年5月17日の記録	三好筑前守義長亭御成の記録
	内閣文庫本「朝倉義景亭御成記」	群書類従本「三好筑前守義長朝臣亭江御成之記」
		午刻(12時)御成 表ノ納戸：先遣の二条殿控える
1部	寢殿： ・式三献 ・義景から太刀、弓・征矢、鎧進上 ・鞍置馬進上、御馬御覽：諸侯庭に伺候	主殿：奥之四間 ・式三献の儀 ・献儀：亭主から太刀と鞍置場。妻方から御覽 ・将軍から観
2部	会所： ・酒肴の供応：十七献、七膳 ・休息所 ・四献の後、能楽開始、十三番 ：座敷にて御覽 ・十献の後、中入りの休息。 御供衆御小御台に参る ・十七献の後、年寄衆太刀馬進上 ：座敷にて御覽	主殿：九間 ・酒肴の供応：十七献 ・奇数の度に献上品 ・三献の後、休息所、奥の四畳半に茶の湯。 やがて面へ御成 ・五献の後能楽開始：式三番～十四番 舞台：九間前の庭
		翌日、巳刻(午前10時)還御
		翌日、巳刻(午前10時)還御

ここで何が行われていたか、その空間や建物が何と呼ばれ使われていたのか、それを知ることができる。そういう希有な遺跡なのです。発掘された建物群や諸施設を模式図に表現すると図4のようになります。

建物の名称もそれらの記録から分かることなのです。將軍御成の記事と朝倉館の発掘成果から、戦国時代の大名館の空間を見てみましょう。

表2は、御成の記事をまとめたものです。これを見ますとプログラムが2部に分かれていて、それぞれ別の場所で別メニューが行われていることが特徴です。当時將軍が大名とか、あるいは寺院などを訪問する、それが將軍御成ですが、その記録を見ますと全く同じように故実こじつに則したがって行われていることが分かります。御成は昼頃に始まり、第1部は、主殿とか寢殿と呼ばれている場で行われた式三献しきさんけんという盃事さかづきごとが主体の儀礼です。第2部の方とは言いますと会所を舞台に行われる盛大な酒肴の饗応、要するに大宴会が行われます。そして、途中から茶の湯や能が行われ、翌日の10時頃、ようやく帰ります。この間、宴会では1献の度ごとにお膳が替えられて朝倉館では17献、多いときには27献となり、奇数の度に將軍に色々なプレゼントがされるといものでした。これは將軍側も儲かりますし、訪問をうけた大名にとっては非常に名誉があるという、まさに権威の象徴たる儀式が行われているということになります。

ここで注意したいのが、1部と2部の舞台と内容の違いです。こちら側が盃事さかづきごとをしているのは寢殿、あるいは主殿であって、宴会をするのが会所、あるいは広間と呼ばれている所になります。これは日本では今に至るまで変わらないのです。この会場の皆さんも、ずっと昔で忘れちゃったという人も、まだだっている人もいるかもしれませんが、ご自分の結婚式を思い出してください。私の結婚式は神前でやりました。神前で三々九度という盃事をします。それがこの式三献しきさんけんにあたります。私と妻がそこで盃を交わし、私が夫でああなたが妻、という夫婦の契約をする、これが結婚式ということで私も式三献しきさんけんやりました。これが大名と將軍がすると、自分は將軍、お前は家来という身分関係を確認する、契約する盃事、そういう人間関係を規定する儀式、というふうに理解できます。この盃事はヤクザがやると親分子分の盃になりますし、盃を返せば縁が切れるという同じ論理をもつことが分かります。ただ、私の家では式三献しきさんけんによって、私が親分になれたのか、嫁さんの家来になったのかそこはちょっと分からないですが。そして続く第2部はというと、私は金がありませんでしたので小宴会でしたが、結婚式では披露宴です。場所を変えての披露宴が行われました。御成でも会場を会所に変えて大宴会が行われました。饗宴と献儀、それから能を楽しみながらの会となります。

ハレとケ、表と奥

これまでお話しした館空間をもう1回確認してみますと、北側には台所や厩のような館を支える日常的な「ケ」の空間があって、南側には今見ましたように接客の、儀式や行事をしたりする、そういう「ハレ」の世界というものがありました。ハレという言葉は皆さんご存知ですね。私には今日のこれが晴れ姿です。先ほど笹本さんに会った時冷やかされました。「ネクタイあったの?」とか言われたのですが、私がネクタイするというのはハレの時だけなのですね。市民の皆様の前に出るので「仕方ない、今日は晴れのスタイルで」と思ってネクタイしました。通常は大体いい加減な恰好しているのですが、ハレはよく使うと思うのですが、普通の方は実は「ケ」と言います。日常のという意味です。ハレの日、晴れ着、あるいは昔は酒もハレの飲み物でした。私のように毎日毎晩酒を飲んじゃいけないですよ。正月とかお祭りとか儀礼などの特別な時に時に飲むのが酒です。餅もそうです。そして、見てきたように屋敷の空間にも同じように日常と非日常、そういうその使い分けがあったということになります。そして、さらにその非日常＝ハレの世界の方にも、先ほど言いましたように、儀式・儀礼をするための空間と、宴会や茶の湯、連歌、あるいは花、香、といったような文芸的な集まりとか、あるいは遊芸的な集まりとかの空間との、二つの空間があったということが分かります。当時の記録を一乗谷に見ますと、儀礼の空間は「表」と記され、宴会や茶の湯などの空間は

「奥」と記しています。同じ館の中が「ハレ」と「ケ」という概念で分かれ、この同じハレの空間も表と奥という二つの空間に分かれることとなります(図5)。実はこのことは私が昔々信濃史学会の学会誌『信濃』に書かせてもらった論文が最初なのですね、今もよく引用される懐かしいテーマです。

さて、その表と奥という空間概念ですが、これは中世という世界を考えるとときに本質的な意味を持てます。なぜかと言いますと、先のように表で行われるのは盃事の儀礼でありました。そこでは主従関係の確認をする、ということでありました。奥の方とはいうと、会所があって池に面している空間があって、そこでは宴会や中世に盛んになる文芸や芸能が行われている。こちらで連歌の会が催される、花を生けたり(立花)、茶の湯をする会が開かれるのですが、これは中世の言葉で言いますと「寄合」という言葉になります。同じ茶の湯をするために、あるいは連歌をするために、同じ目的をもつ人が集まり(一座建立)、社会的な身分が高い人も身分が低い人も一つの同じ空間を楽しみましょう(貴賤同座)ということです。ある意味世俗の身分関係を捨てた場で、同じ目的のために集まった人たち(一味同心)の関係を作る「一揆」の空間、これが奥という空間でした。一方、表は、主従関係、身分制度を契約、確認する、つまり上下を建前にした空間ということになるので、全く違う両極端な空間が権力の中心である朝倉館をはじめ、大名の館の中にセットで存在すること、これが中世なのです。そして、それが秀吉の頃、中世の終わり、近世に変わっていく頃になりますと、奥の空間がなくなっていきます。会所という建物もなくなりますし、そういった一揆の寄合という原理は権力の中では否定され、寄合や会所も別の意味に変えられてしまうのです。

そして、次は表と奥という空間概念は、朝倉氏だけの話なのかということが問題になります。そうではないのです、これは豊後府内、大友宗麟の館ですが、2町四方の四角い館で、こちらが東側でそこに大きな街路があり、それに表門が開いていたはず(図6)。そこでも同じように、当時の年中行事を記した「当家年中行事日記」の史料を読むと表と奥という言葉がでてきます。例えば東の表門「大門」を入ると「大庭」(広場)があり、それに面して「大おもて」という主殿に相当する中心建物や「遠侍」など館の東側に位置して表の空間に相当する施設群が記されています。一方、「寝所」(当主の寝間、常の御殿など)や「御台所」(当主婦人の居所)などの奥の機能をもつ建物などが別に記されます。さらに「表の番衆」「奥の番衆」などの表と奥が対語で記される記事があります。また「大おもて」では、年頭の対面儀礼などの公式の行事が行われているということも分かります。一方、不思議なことにこの館を特徴づける大きな池庭、発掘された戦

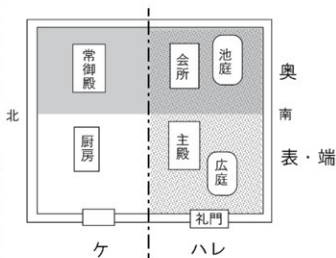


図5 都型館屋敷空間模式図

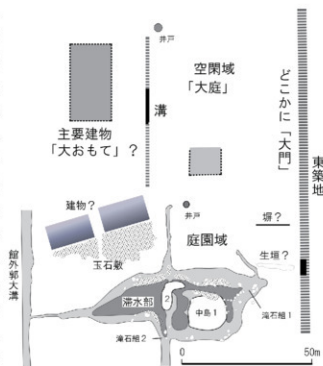


図6 大友館東半模式図

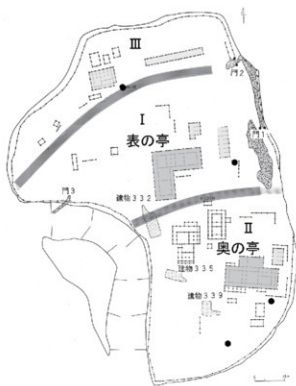


図7 根城本丸模式図

図7は、一番北の例として青森県八戸の南部氏の根城、本丸の部分を示しました。この南部氏の正月の対面行事の記事を読んでみますと、「奥の亭」、「表の亭」という言葉が出てきます。先ほどの表と奥の関係がここにも出てくるのですが、ここでは興味深いことが分かります。元旦は、南部氏の狭義の南部家の者が「三献看法」という式三献の行事を行います。2日には奥の亭で、南部氏の狭義の家の者でまずお祝い事が行われて、次に表の亭で今度は家中、家臣団とともに、いわば領国単位での式三献が行われます。その後、これがまた面白いのですが、一揆的に全員に酒を回しながら乱痴気騒ぎをやるという訳です。ここでも先ほどの表での式三献とその後の大宴会というのがセットになっているらしいことが分かります。この場合は表が対家中、南部領国の者たちを集めてやる儀礼、奥が家の者の行事ということで、表と奥が公と私のような形で使い分けられていることとなります。図7のこちらが奥の空間、こちらが表の空間、ここは本丸入口になります。このように、館の空間が、表と奥、あるいはハレとケという異なるふたつの概念の空間の組み合わせから構成されていて、単に建物や庭園があるというだけではなく、その使われ方、そこが持っている機能が大きく異なるのだという話でした。

また、図を見るとお分かりのように根城には庭園がない、池庭がない館です。ちょうどこの池庭がある境は福島県の伊達氏の館です。伊達の館よりも西側と言いますか、京都そして九州に至るまで、大名クラスの館だと基本的にみんな池庭を持っています。それに対して、伊達氏、ちょうど福島県の霊山から新潟県阿賀野川を結ぶライン、それよりも北の世界では基本的に池庭を持ちません。そういう池庭を持たないというような重要な要素に違いが認められる世界でありながら、館の空間原理というのはよく似ているのだ、とそこに注意していただけたらと思います。

都の屋敷と家格

それでは、そういった館のモデルがどこにあったのではないだろうかについて考えてみます。戦国大名たちの館のモデルになったのはおそらく京都にあった将軍邸や管領邸だろうと思います。この図8は洛中洛外図屏風といまして、16世紀中頃の京都の風景を描いた屏風絵の一部です。皆さんの資料の中に

国時代の館の中では一番大きい東西60mもある池庭が発掘されているのがこの館の特徴なのですが、池庭やその周辺にあった建物などの記事が出てきません。おそらくこうした池庭をめぐる空間で行われた諸行事がイエとして執り行う公式の年中行事として位置づけられるものではなく、ある意味、非公式の、臨時的な接客儀礼と意識されていたからだと考えられます。

これは山口の大内館です。大内館はちょうど2町四方位の方形の館です。こちら側が東、このブルーシートがかかっている所に大きな池庭が発掘されています。ここでは26m、30m弱の大きな庭が発掘されています。東南の方にこういった池庭がある空間構成が大友館と一緒にですね、ただここは興味深いことに西の外れにも枯山水の庭が発掘されています。さらに近年東の門を入ったここにも枯山水の庭園が発掘されました。館内の儀礼とかの建物については、残念なことに館内に寺院があるので発掘がちょっと難しいものがあります。一方、

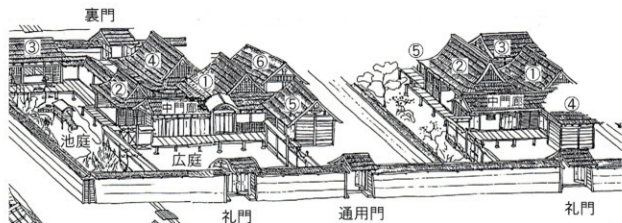


図8 細川邸と典厩邸

も同じスケッチを入れておきましたので後で見てください。写真は公方邸、つまり將軍邸です。そして図8の右が典厩という屋敷で、左は管領の細川邸です。管領というのは將軍を補佐する役目です。この頃は細川氏が管領になっていました。先ほど最初の所で話しました勝瑞館も実は阿波国の守護細川氏の館と考えられる遺跡です。元々阿波は小笠原が守護として入っていたのですが、それが追い出されて細川氏に取られてしまう、それが阿波の守護家、本拠が徳島県の勝瑞という場所にありました。管領は京都の細川氏の本宗家で、京兆とよべれます。東に表門がきますので、図の左が南です。屋敷内は建物群が北半分が集まっていて南側には大きな庭園が描かれています。もちろん池庭です。東の門を入りますと広場（広庭）があって、広場の奥へ進めるように入口が続いております。これは中門というのが正式名です。ここから入るのが主殿、これが先ほどの式三献をした儀礼などの対面空間でした。この池庭に面して開放的な建物が描かれますが、これが会所で先のように宴会をしたり芸能をしたりする庭とセットの空間でした。そこから裏門の方には台所があって、ケの空間になります。先ほどの朝倉館などで確認してきた、あれと同じ空間構成になることが分かります。こちらが將軍邸です。細川氏よりも一つ格上の屋敷です。管領邸と同じようにここに大きな池庭があって、似たような建物群が描かれます。ただ屋根を見ると管領邸のように板葺きではなく、檜皮葺きですし、門の型式なども、すべてがさらに1ランク上になります。お手元にある資料の図左は管領邸、右が典厩邸ですが、管領は先ほど言いました細川氏の本宗家京兆です。典厩は京兆の弟分、庶流の屋敷で、家格に上下があります。典厩邸は屋敷のサイズがうんと小さい。庭は池庭ではありません。平庭です。管領邸は大きな池庭が目立ちます。門はといいますと、表門と通用門二つ持っていて、表門は唐門と呼ぶ一番格が高い型式の門です。通用門は棟門です。典厩邸の表門は管領邸の通用門と同じ棟門になっています。建物の数もぐんと減っています。主殿への正式の入り口である中門妻戸の入り口のこの唐破風という飾りがつくのですが、典厩邸では唐破風が付いていません。このように具体的に建物や屋敷の外構え、門はどういう型式の門を持っているか、そして池庭を持っているかどうか。儀式をやる建物主殿の入り口の形などがランクごとに決められていて、家格、その主人の身分、そういうものが直接的に反映されて描き分けられているのだということが分かります。この本家を超えて弟分の屋敷が同じような屋敷、建物を造ることはできなかったのです。

こうした都の將軍邸とか、管領邸などの都の武家のトップクラスの人たちの屋敷、それと同じような屋敷が、先ほども見てきたように、全国の大名家クラス、あるいはそれよりもうちょっと下のクラスの館に建物や館空間の類似点が見られるのです。当然これは屋敷だけを真似するのではなくて、その屋敷とセットになって同じような儀礼をする、同じような行事をすることが前提ということです。先ほどのように、その結果、朝倉館の御成にみるように、同じようなプログラムが行われてきたわけです。こうした屋敷の大きな池庭を見ていただくと、この時期に庭が特徴的に示す家格の表現の意味が分かってきます。一乗谷でも一緒です。一乗谷という同じ世界で、池庭を持っている屋敷は当主大名の朝倉館、それからその母親の館、妻の館で寺

院を除くとそれだけなのです。その下の同じ朝倉を名乗る同名衆たち、その筆頭の朝倉景鏡館でも池庭は出ていません。ただの平庭です。同じように屋敷の区画に堀を持っていたかどうかなどにも、家格、階層性が反映されています。この時代には、屋敷は金さえあれば「じゃあ私も造るよ」という世界ではなく、家格や身分によって社会的な規制があったわけです。逆にいえばそれを持つことによって自分の権威というものを象徴的に外に向かって示すことができる一番重要な施設だった、ということになります。

池庭に注目してみましょう。先ほど竹原さんの話の中で、今回殿村遺跡の寺と考えられる所で庭園が発掘された、という報告がありました。殿村は寺の遺構と考えるのが妥当だと思っています。と言いますのは、元々武家の館に庭というのは必要なかったのです。儀礼そのものがそうなのですが、中世になって武家が社会的な権力を持ち始めます。武家はずっと遅れた新興勢力なのです。そして鎌倉幕府が開かれて、そこに將軍の大倉御所が造られます。そうなった時に初めて「ああ、京都の政権を牛耳る公家と付き合うためには公家風の儀礼や儀式を取り込まなきゃいけない」ということで將軍邸が、都の公家と同じような方形の館として造られ、そこには寝殿造の屋敷として南庭と池庭が持ち込まれています。しかし、一般の御家人たちにとってそういう儀礼は自分の屋敷では関係ありませんので、鎌倉時代の武家館で、池庭を持っている館というのは基本的にありません。東国御家人の館を見ると、東国独自の建物群が特徴的です。もう一つ初期の武家の館で、池庭を持っているのが平泉の柳の御所です。ここは武家の館というよりは古代の陸奥国府にかわる政庁としての場所ですので、大倉御所と同様に政庁としての機能の中で必要だったということで造られたというように見えています。もちろん寺院の方ではずっとはやくから寺院のパーツとして池庭、庭園を含む世界というのがあります。その後、武家の屋敷にも池庭が導入されるようになってきます。いつ頃かと言いますと、15世紀半ば頃からです。その早い例が、例えば先ほど話にも出てきました、飛騨の江馬館だとか、あるいは美濃の東氏館などです。その後、15世紀の後半には、あるランクの武家の屋敷になると池庭が多くなるようになるという動きが確認できます。それは先ほど屋敷の空間でもお話ししたように、戦国大名クラスが応仁文明の乱の終了とともに京都から自分の領国に戻って行って、領国の経営に熱を入れ始めることと連動しています。その時に自分の権威がこういうものだということを、在京中に見ていた京都の將軍邸とか管領邸に代表される、都風の館景観を持ち込むことによって地元民に対してアピールする、そういう必要が大きく増したのだらうと私は思っています。そうした動きを反映して、15世紀後半から池庭を持つ、あるいは後でお話しますように、焼物などにみられる威信財、あるいは京都風のかわけを使う儀礼などの問題が、顕著になってくるというように言えます。

モノから語る権威

これは先ほどの井川城の出土品です（写真3）。まだあまりたくさんのお宝は発掘されてないみたいですが、確認しておきましょう。こちらは中国製の青磁の花生です。花瓶みたいなもので、かなり的高级品です。こちらは青磁の香炉です。これは茶壺の耳の部分、ただこれは中国製ではなくておそらく写真で見ると瀬戸の茶壺だと思います。中国製の茶壺はそれよりだいぶ高い値になります。少ない出土品ではありますが、一応小笠原氏の屋敷ですので、この程度の唐物は持っていた、当たり前といえば当たり前なのですが、本当はもうちょっと持っていたかなと思いますが、発掘ですから仕方ありません。これらとともに井川城からたくさんのかわけ、土器の皿が出土しました。

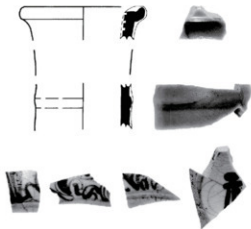


写真3 井川城の青磁花生と染付碗

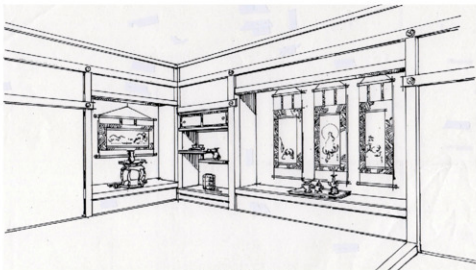


図9 畚形座敷室礼

この皿は色々な用途で使われます。一つは灯明皿、これに油を入れて灯を灯すと夜も明るくなります。それからもう一つ重要な使い方が、先ほどの式三献などのハレの席での盃事の儀礼や料理の時に使われます。その話は後半に残します。これは一乗谷から出土した唐物の威信財です。中国製の茶壺・茶入・天目茶碗の茶の湯のセットです。それから青磁花生と青磁の太鼓胴盤で花を生けるものです。それからこれが梅瓶と呼ぶ口が小さい瓶、これは酒海壺、酒の海の壺と書くようにまさに酒をなみなみと満たして宴会の席に持ってきてそこから提子ひしに移して酒を注ぐものです。梅瓶も同じです。こちらは青磁の大皿でここには料理を載せていました。これは香炉です。

こういった道具は、一乗谷のみならず他の城館でも似たようなセットが見られるのが特徴です。これは甲斐の武田館の出土品です。これは青磁の酒海壺、太鼓胴盤、大型の青磁香炉です。これは八王子城北条氏照の館の出土品です。梅瓶や酒海壺などがあります。またここは池庭が発掘されています。武田館も同じように池庭があることが分かっています。全国の主だった城館を見ますと大体こういった道具類が似たようにみんな持っていることが分かります。一番北の方は、青森県の津軽浪岡城なみのり、南部根城です、そして先の信濃の高梨館（中野館）、ここでは数えてみると同じような器種を複数個もっていることが確認されます。それから四国へいくと阿波勝瑞館、先ほどの細川館です。つまりこういった道具が、同じような道具が同じように持たれているということが確認されるのですが、それがなぜなのか問題になります。

こういった道具はどんな場所で、どのように使うのか。先ほど最後の室町將軍義昭が一乗谷で元服をしたという話をしましたが、その時の記録が残っていて、それには主座敷になった「畚形の座敷」の座敷飾りが記録されています（史料1）。図9は、その記録からそれを復元したものです。この時代、こうした唐物を飾る装置が二つありました。一つは床の間の前身になる押板おしいたと呼ばれる所、もう一つはその脇に作られた違い棚です。これが主たる唐物飾りの装置でした。押し板を背に客人は座り、式三献をしたり、大宴会をしたりします。その座敷を荘厳するため、行事に合わせて室礼する座敷飾りとしてこういう唐物がたくさん使われました。もちろんここに掛っている三幅一對の観音図や山水画、こういうものもみんな唐物です。ここに飾られた様々な道具、こういう座敷飾りに、同じような品々を同じように飾る故実、ルールのようなものがあって、ということが分かります。例えばこれは相模小田原城北条氏康の屋敷に、鎌倉公方、関東を管轄する室町幕府の出張所の將軍ですが、その足利義氏が元服の御成になった、その時の記事です（史料2）。御成の故実のとおり、寝殿での式三献があり、会所での饗宴がありました。会所の座敷飾りを見ると、押板には三幅一對、その前に三具足（香炉、鶴しよこの燭台、青磁花瓶）が置かれました。違い棚には上に烏蓋うしかいの茶碗井台堆紅、つまり漆の台にのった天目茶碗が飾られた。下には、葉籠、中国製の漆器の重箱みた

いなものが飾られたわけです。

こちらは、「君台観左右帳記」という巻物の一部です。君台観左右帳記とは何かといえますと、將軍足利義政が隠居所として東山殿という山荘を造ります。その会所の座敷にどのように唐物を飾ったのか、それから当時流行の唐物の絵画や茶道具の品評を絵と文章で書いた巻物です。この「君台観左右帳記」の最初の部分は、唐絵の品評で、中国の絵師の名前とその得意なテーマ、山水画が得意だったり人物画が得意だったり、さらには絵師が「上」「中」「下」のグループになって品評されているのです。朝倉氏もこれを書写して保持していました。山口の大内氏も実はこのコピーをもらっています。現代のようにコンビニへ行ったら自分で簡単にコピーできる時代じゃありませんので、幕府の同朋衆というこうした唐物や室礼を扱う芸術集団がいるのですが、その人達に高い銭を払って墨でこれを書き写してもらおうのです。おそらく朝倉氏や大内氏だけではなく、多くの権力者が都の將軍の屋敷の唐物飾りを知るために欲しがったと思います。ちょうど唐物飾りの指南書のような性格を持ったわけです。これを見てもみると、例えば「一間押板の飾り」とか「茶湯朝の飾り」とか具体的に飾り付けた状態が、事細かに絵付きで描かれています。このように先のような都の建物だけが各地に導入されているのではなく、座敷の中の飾り方まで、当然これは儀礼とセットになりますが、何をどのように飾るのか、どういう道具を持っていなければいけないのか、全てがセットで動いている、という話になってきます。こうしたことが背景にあって、発掘された城館の威信財を見ると先のような似たあり方をしているのだと分かるのです。そして、表にあるように、池庭なども連動していることからそれがモノだけの世界ではなく、館空間にも及ぶらしいということが言えるのです。

かわらけ（土器）が語る権威

これは一乗谷で出土した、焼き物の碗と皿類を集めた写真ですが、こちらは中国製の青磁、白磁、染付、こちらは瀬戸製の鉄軸と灰軸、奥の方には土器の皿かわらけがあります。このように中国からはきれいな絵を描いた碗や皿が流通し、瀬戸からも色々な釉薬をかけた皿がきているのですが、なぜか正式の宴席で使われる、あるいは儀礼で使われる皿は全て土器を使います。こういった土器類を使って、料理が盛られます。これは大内館で前將軍義隆を迎えて饗応したときの記録にある料理を復元したものです。義隆は京都を追われて山口に行き大内義興に保護されます。そしてその時にこの大内館で御成があり大宴会が行われるのです。現在山口へ行きますと、この内の3品だけ復元されていて、ある料理店で食べさせてくれます。山口へ行きましたら是非雰囲気味わってください。このようにかわらけに盛りつけた料理が白木の折敷おしきに載せて出されます。土器のかわらけも軸を掛けない土器でした。つまり素焼きです。ここに先ほどの様に料理を盛ったり、あるいは酒をいれたりすると、汚れが染みついてしまっただ二度と使えません。ですからこの白木の折敷もそうですが、1回だけ使われ、そのお膳が下げられるとまた新しいお膳、新しいかわらけで料理と酒が出てくる、ということが繰り返されます。この御成では27回お膳が替えられています。毎回毎回たくさんの土器が使われる訳ですから、その結果土器類が大量に捨てられるわけです。それらは、宴会の後に穴を掘ってまとめてその道具を捨てています。館を発掘するとうした廃棄の穴がたくさん見つかります。これこそが権力の象徴だったのでね。実は土器の皿というのはすごく安い。中国の染付のきれいな皿は、大体1個買っても16世紀で30文位でした。かわらけは10個で1文とべらぼうに安いのです。それにもかかわらずこの安いかわらけでなければならなかった。それがかわらけの持つ意味なのです。「枕草子」を読み直してみるとそこに書かれていました。「清しみゆるもの、かわらけ」です。物は付け、「なにになにと見ゆるもの、何々」あれです。「清しみゆるもの土器(かわらけ)」と筆頭に書いてあります。多くの清浄、清潔のものなかから一番がかわらけでした。ハレの場面に使うものとして二度と使わない、常に新しいものを出すという、儀礼の場でお客さんを迎えるのに清浄なかわらけを使うというところに価値がありました。

私は横浜の田舎の出身です。私が小さい頃、神棚に正月のお雑煮をあげる時に木のお皿であげていました。それは焼物ではなくてまた漆の掛けていない木地の皿でした。そしてそれは年末の年越し市へ行くとういうのが売られていて、わざわざ毎年新しい木の皿を買ってきて、それで神棚にお雑煮をあげる。もちろん三が日が過ぎるとそれは捨てられるわけですね。それと同じことです。そういう新しい清純な器としてかわらけが選ばれた。また、同じかわらけでも、どうせやるならば京都風のかかわらけの方が格が高い、見映えがいいという論理ができてきます。屋敷も京都風がいい、道具も京都風がいい、元々、この山口大内氏の周辺では在地には、地元で作っていた轆轤で作ったかわらけがありました。轆轤の方が薄くひけて価値も上のように思うのですが、実は京都では轆轤を使わないかわらけが作られています。手づくねという、轆轤を使わずに手で全部作るかわらけです。こちら側の方が都風で格上なのですね。そのため、この京都風のかかわらけを、大内でも導入します。ちょうどその時期が先ほどの前將軍義禎が、山口に来た頃になります。そして大きな庭園を造ったのも同じ頃になります。そのように、屋敷や庭園、そして儀礼の場や道具、そういうものが急速に整備されていくのと連動して、義興は京都風のかかわらけ文化というものを山口に導入したことになります。

15世紀頃の宴会の場面を覗いてみたいと思います。これは15世紀の宴会を描いた絵巻物の場面です。先ほど見ました酒海壺、青磁の大皿、梅瓶と呼ぶ瓶、どこにあるかと言いますと、ここにまとまって描かれています。その脇ではまさに提子という酒を盃に注ぐものに注いでいます。三々九度の時、提子や長柄の銚子などを経験したことと思います。青磁の大皿もその陰に隠れて置かれているようです。つまり、こういった道具はみんな、酒器、酒の道具だったということが分かります。そして今ここで主人が酒を美味しく飲んでいますが、これがかわらけです。

最初に1573年に滅んだ朝倉の周辺から出た、梅瓶、そして酒海壺、花生などの威信財として紹介しました。それらの多くが作られた年代を見ると、13～14世紀のものであり、つまり鎌倉時代頃の骨董品だということになります。したがって、鎌倉時代のもので延々と16世紀の大名の居館の中で使われていた、ということなのです。これと同じような道具を探してみると、鎌倉で同じような品々が発掘されているのです。そこには全く同じ梅瓶や酒海壺がありますし、白磁（じやくじやく）の四耳壺（しじり）があります。つまり、鎌倉時代に使われていた中国製高級陶磁器の酒器が、戦国時代、16世紀の終わり頃になってもまだ、大名屋敷の中で後生大事に使われていた、ということなのです。朝倉氏のような戦国大名が使っていた威信財を追うとその先に室町將軍邸や、あるいは細川管領邸のような所で使われていた儀礼とセットがあり、そこには君台観左右帳記のような世界が広がっていました。その室町將軍の先には、武家政権のルーツとしての鎌倉將軍の世界がありました。武家政権は元を正せば東国の田舎から出て行ったおのぼりさんなのですね、権力を持って、のこのこと京都へ入って行って、室町幕府をつくった、しかし、周りを見ると右も左も公家さんやら、寺院やら昔の権威に根ざす故実や儀礼、文化が広がっていて、天皇を中心とする権威の仕組みの世界があり、京都ではそれらと対等ややっていかなければならない。それらを取り入れながら新しく武家の価値観を持った、空間を造っていく、あるいは儀礼を作っていくことになります。そのルーツとしての鎌倉の酒器セットが伝統的な武家の威信財になっているのです。例えばかわらけの式三献という儀礼は、実はお公家さんたちはやりません。もちろん宴席などでかわらけは使うのですが、式三献というのは、主従関係を結ぶ武家儀礼ですから、公家には無用のものなのです。それをもう少し見てみましょう。

これは奥州平泉です。ここでも鎌倉と同じ、白磁の四耳壺、かわらけという土器のお皿で酒を酌み交わすことでそれらが大量に残されました。戦国大名が後生大事にした威信を示すはずの、威信財と私が言った品々が何だったのかっていうと元を正せば饗宴の器、酒器だったのです。都の天皇は、元々天皇は神の子でありますので誰が何と言おうと絶対的に王権、天から認められた権力、権威というものを持っています。そ

れに対して武家というのは何もないです。天皇の都、あるいは天皇の治めている日本が無事で、安寧であるように守るという役目を下請けしている、武力をもって奉仕しているという世界です。そうした武家が権力を持つとする時に、その根源となる兵力・武力をどうするかですが、そこに主従関係という原理で、武家独特の人間関係を擬制的なイエを組織する、それが兵力をつくり武力を動員する形をつくった。その構造は、頂点が将軍にあり、国単位で権力をもつ守護としての大名、さらには領国の中にも国人や国衆という小権力があり、それらが入れ子状に二重、三重に構成されていることになります。それらの原点である主従関係をつくる時に行われていたのが、先ほどまで見ていた式三献ですから、武家にとっては一番重要な根源的な儀礼の場面ということになるのです。したがってその場で使われる酒器が長く武家の権威を示す道具、威信財になっていくのは当然のことだったといえます。同様に安いけれどもかわらけもまた権力の象徴になっているのです。

都の権威を利用する権力

小田原を舞台に見てみましょう。先にお話した論理から、使うかわらけもただのかわらけより京都のかわらけの方がいいという話になってくる訳です。これは小田原城から発掘されたかわらけです。見てください、手で撫でた痕跡が強い段になって残されています。轆轤を使わない手づくねで作られたかわらけだということが分かります。小田原のこのかわらけは実にたくさん興味深いことを語ってくれます。小田原城主は北条氏です。北条というのは鎌倉時代にも、執権として将軍を補佐した北条というのがいましたね、元々、この小田原城へ入る前には伊豆に本拠を持ち、伊勢を名乗っていました。ちょうど2代の頃、1518年に二代目の氏綱が家督を継承します。そして、小田原城へ入るわけですが、同時に伊勢から北条へと姓を変えます。「北条」という武家にとって由緒ある姓を名乗るのですが、まさか将軍の名前を取る訳にはいきませんので、将軍の下で執権として実権を持っていた北条を名乗っているわけです。さらには領国支配を正当化するために、さまざまな手段を使います。他国の者が来て相模国を捕ってさらに武蔵のほうへ触手を伸ばすことに、当然ですが在来の権力からは大きな反発が起こります。例えば江戸城には上杉氏がいたのですが、江戸城を氏綱が分捕ります。そうしたら「他国の凶徒」、ならず者がうちの城を取ったというわけですね。突然伊豆の方からやって来て小田原へ城を造ったと思ったら、今度は江戸城を捕られたという訳ですからこういう言い方になりますが、氏政もこのままでやっていけない、どうする、もうちょっと世間が認める権威をつけようということになります。自分が覇権を拡張することの正当化、まわりの諸権力にそれを納得させようとうします。1528年、都の関白近衛尚高の娘を後妻に貰います。続いて29年・30年には従五位下、左京大夫というかなり高い官位を天皇からもらいます。これによって朝廷や幕府から「お前の権力は正当である」というお墨付きを貰うということです。ちなみにこの従五位下というのは、戦国大名では普通で、大体従五位下です。とんでもなくお金をたくさん払って四位になる大名もいるのですが、基本的には従五位下これが並です。それから左京大夫という官職ですが、これも律令期平安時代のもので、元々平安京の右京・左京と半分ずつある左半分を管轄する長官という意味です。戦国時代には実際に都の左京を管轄するわけでも何もないのですが、この時期に戦国大名に人気があった官位でした。この直前に、陸奥の伊達氏も叙任されていました。隣の甲斐の武田氏も一緒です。その頃はまだ伊達は陸奥の守護を名乗れないのですが、にも関わらずこれを買っている。そうなるとおさまらないのは北条氏です。彼らと対抗するためには自分も買わなきゃということで、伊達氏や武田氏と同じランクになることによって、相模を捕り、そして武蔵に兵を進めて自分の領地を広げていくことの正当性を世間に認めさせるということをしなす。そして更には将軍の御相伴衆おのうけばんしゆうという栄誉職を買います。これも実態が何にもないもので、行列を整えて歩くときに、日傘に白い覆いを付けていいとか、馬の鞍くらに緋毛氈ひもみぎを敷いていいとか、その程度の格好つけです。しかし、これを貰うことは、建前では幕府の

直臣となり、管領と同格になったことを意味しますので、都から遠い遠国の武家権力としては、朝廷や幕府から認知してもらったということになります。こういうことをしながら小田原北条氏は相模1国を乗っ取り、武蔵をとり、下総・上総へ兵を進めて、さらに北関東へと進出するのです。この時も、娘を関東公方に嫁がせ、関東公方家の「御一家」となり、それを後ろ盾に進出します。先の関東公方義氏の元服が小田原城で行われたのもその一環でした。北条を名乗ることも表現されているように、小田原北条氏は東国の武家棟梁への意識、これが非常に強いのです。かわらけ問題から言えば、東国の大名のなかで、京都系の手づくねかわらけを導入したのは、小田原北条だけでした。武田氏も佐竹氏もそれまでの地元にある権軸かわらけを儀礼に使っています。北条氏は武家棟梁としての立場を強調しようと、箱根権現、三嶋大社の修復、造営を行います。これらは源頼朝が崇敬したところで鎌倉將軍家の権威に重なります。特に鎌倉の鶴岡八幡宮を造営するのは東国の武家の棟梁としてのシンボルです。これらの修復事業をすることにより、小田原北条氏は、自らを東国武家の棟梁だと宣言しているのです。都の天皇や将軍・幕府、そして東国の関東公方などの旧制的、前時代の権威を巧みに利用することで、覇権を拡張する典型的な権力のあり方を見ることができそうです。この後も江戸時代には徳川将軍3代家光が同じように鶴岡八幡宮を修築しています。

誰に見せるための権威か

ここまでは、都の権威をモデル的なものと受けとめ、それを導入する権力の話を中心にしてきました。ここで逆に導入しなかった権力、世界があることをお話ししたいと思います。図1をご覧ください。この図は、各地の戦国時代の城館で、発掘の結果、池庭が確認された遺跡と確認されなかった遺跡を示したものです。そして、この黒い四角がついている所は発掘で池庭が確認された城館です。白い丸がある所は発掘がまだ全部されていないのでどちらか分からない城館です。それから白い四角は発掘したが池庭がなかった城館です。京都が中心にあります。遺跡の発掘では、地層が削られてしまうと建物の遺構が残らないことが多いのです。特に礎石建物だと、石が飛ばされるとまったく痕跡が残りません。一方、よく残るのが池庭なのです。地面を下に掘り込んでいますので、かなり上がやられていても池庭があったことが分かります。したがって、特に池庭があるかどうかは各地の城館を比較するときに重要な視点になっています。そうした目で見ますと、現在までの発掘で一番北で池庭が発掘されているのは伊達氏の梁川城です。それよりも北の世界では池庭が発掘されていません。また、同じようにこの北側の世界では、先にも申し上げたように儀礼にかかわりを使いません。境界の梁川城では大量のかわらけが出土しています。ちょうど二つの要素の境界が同じラインに重なっていることが重要です。京都風の儀礼に重要なかわらけが使われない世界はまた、館空間も京都風の景観とは異なるものだったらしいことが分かります。

都的なモデルを明確に拒否したとも言える世界、それがこの北の世界です。陸奥の北部、南部や津軽です。根城というのは、八戸南部、この頃実質的に南部の中心だったと思うのですが、本惣家は三戸にある聖寿寺館です。ここでも発掘が行われていますがかわらけは一切出てきません。またこれまでの中心域の発掘では池庭も確認されていないのが特徴です。これは南部の根城です。図7を見てください。これが本丸ですが、真ん中のL字になるのが「表の亭」(主殿)です。少し下になる中心建物が「奥の亭」(奥御殿)です。池庭がなく、建物もまた地域独自の平面形を持っていますし、前後の時代毎の変化も独自性が見えます。また儀礼の世界では、漆塗りの酒杯が使われることが記録に残ります。先の小田原城なら絶対にありえないことがここでは行われているのです。決してかわらけが買えなかった訳じゃない、安いですから。そして、唐物の威信財も出土しています。池庭も造って置けないことはない。こんな立派な建物を造っているのですから技術も知識もあったと思われます。同じく京都風の建物も造ろうと思えば造る技術があったといえます。それを意識的に選択しなかったのがこの世界の権力のアイデンティティーでした。

誰に見せるための権威か、誰に見せるための晴舞台だったのか。戦国の世に、相手は二つあったと思っています。一つは同じ競争相手である戦国大名。まさに覇権争いをしている相手、周辺の大名権力、あるいは遠く都の幕府等の権力、そういったものに対して自分はこれだけの実力と権威と、そして都に対する文化的な繋がりを持っていますよということをアピールする必要があった。もっと言えば具体的には、都の上位権力からこういう官位を貰い、あるいは御相伴衆のような栄誉を貰い、そして都に対してたっぷりとお返しをして、將軍・幕府や天皇・朝廷との繋がりもありますよ、という主張です。故実に則った儀礼や文化をわかまえていること、都の上位権力に認められていること、その世界で一定のランクの権力として評価されることが生き延びるためには不可欠な時代だったということを先の遺跡の情報は語っています。武力の強弱が権力の強さを決めるという戦国時代のイメージからは、逆説的ですが、槍や鉄砲だけでは生き残れなかった戦国時代だと言えるでしょう。だからこそこの時期に武家故実が規範的な意味をもって記録され、多くの故実書が残されたとも言えるのです。

もう一方の相手が領国内です。自分が抑えている領国、信濃国でも、越前国でも、大名が自分の領国内に向かって、都風の建物、都風の舞台を使って、一定の格の威信財を飾り、かわらけて儀礼をすることを見せることで領国内の諸権力を納得させることです。

あの小田原の京都風のかわらけの出土状況には、もうひとつ興味深いことが指摘されています。小田原で作られた手づねのかわらけは、本城の小田原城だけが使うものであったことです。他の八王子城など一族が護る支城においては、小田原かわらけを模倣した轆轤作りのかわらけが使われたことが指摘されています。つまり、かわらけの使用に宗家としての家格を表現し、他の城とのヒエラルキーを可視化するためにも使われたということです。儀礼の場の重みがかかる重要な指摘です。

また、各地の大名は、自らの権威を示すため自分の領国内でも対面儀礼などの諸行事を行いました。その典型が正月等の年中行事や代替わりの行事です。そういう場が御成のミニチュア版となって同じように行われています。そこでは、領主と家来、国衆といった領国を治めるものとそれを支持し、従う立場の契約が行われるのです。戦国大名は思うほど権力は強くなく、領国のなかの諸権力といかにいい関係を保持するかに腐心しています。それがこうした年中行事でした。大友氏の年頭の対面行事では、盃事の儀礼のあと、無礼講の「乱れ酒」の宴が延々と続くことが記録されています。そして、大友家や南部家など各地の家々に、そういう家の年中行事を有職故実的に記録したもの残されています。「当家中作法日記」は大友氏が残した日記です。それから、新潟の阿賀北地域では色部氏という国人領主がいますが、ここにも「色部氏年中行事」という1年間で行われる家の行事の詳細が記録されています。

これは群馬県の太田金山城という山城です。ここはどういうお城かといいますと、元々、この地域一帯は武家中でも名門の新田氏に係わる地域でした。この新田の一族の岩松氏が文明のはじめにここに山城を築きます。この山城が作られる前に何があったかが興味深いのです。発掘した結果、日の池という大きな、直径が15mか20m位ある石垣で作った円形の池が見つかりました。本丸への城門を上がってきますと月の池、日の池という二つの大きな池のまわりを通して、本丸に行くルートができています。そして、この日の池を発掘する時には土で作った馬が見つかりました。これは10世紀頃の土馬と言われているものです。考古学をやっている方はもう意味が分かりますが、土馬は古代に雨乞いなどの水の祭祀に使われます。ですから、この城が造られる以前は、ここで水の祭祀が行われる聖なる水場を持つ山だったといえるのです。この山頂に水が湧くこと自体が不思議ですが、地域の民衆に崇められた非常に重要な意味を持つ山だったので。また、これは日の池から少し南の場所で発掘された1m位の焼物の仏塔、瓦塔と呼ばれている塔なのですが、これも古代において信仰の場であったことを示します。こういう瓦塔が使われる、あるいは水の祭祀が行われる、まさに聖地でした。さらに中世前期には亡き先祖を祀る板碑が出土していますので、ここが墓

地や先祖供養の場でもありました。そういう場所に戦国期になるとお城が造られた。つまり、周辺の人びと崇めていったこの山に、俗権力の武力を持った新しい支配者が入った。まさに象徴的な場所で、「これからは私がこの世界を牛耳る、領主である。」っていうそういう宣言をしたのではないか、と思うのです。それを意識してこの場所に彼らは城を造ったことが理解できます。

新しく権力を持った武家が、どのようにして権力を根付かせ、そして他の権力とのやりとりの中でみんなが持っている武力だけではなく、槍や鉄砲だけではなく、都の威信を利用しながら付加的な力を使いながら生き残りを図っていったということをお話しました。皆さんが聞いていて不思議に思ったかもしれませんが。戦国時代というのは、鉄砲や槍、刀、まさに武力に裏付けられた実力主義の社会じゃないか、私も昔はそう思っていたのですが、それだけではなかったのだということです。朝倉氏のような下剋上とよばれる成り上がりの権力こそが、逆に、旧制的な都の権威からの保証を必要としたのだということになります。また、今日お話した威信財の世界、館の空間は、今日の例でお分りになったように、いわゆる京都から遠い遠国ばかりだったことです。都周辺の話が出てこなかった。阿波の細川くらいしか出てきませんでした。こうした周辺こそが、都の権威を利用することを積極的に考え、あるいはその効果が一番顕著に現れる、そんな場所だったのかもしれない。

話が長くなりましたがちょうど時間になりましたので、私の方の話はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

＊当日の講演では、スライドなどの写真を多用しましたが、刊行されるにあたり、それらを省略しました。理解しにくい点をお詫び申し上げます。

史料 1

永禄元（1558）年 4月 28日

「義氏將軍北条左京大夫氏康私宅御成」（「鶴岡八幡宮社参記」）

- ・未刻御成 妻戸の前に立砂、
- ・「寢殿」：式三献 弓、征矢、鎧甲、栗毛馬、銀劍
- ・「会所」：五献の各進物
 - 初献：太刀
 - 二献：唐絵三幅一対（中尊 率翁、脇 李龍眠筆）
 - 三献：太刀
 - 四献：盆（桂槩）・香合（堆朱）
 - 五献：太刀
- ・座席之飾
 - 「押板」 三幅一対、三具足（香炉、鶴の燭台、花瓶青磁）
 - 「遊棚飾」 上ノ重 烏蓋之茶椀并台堆紅（＝建蓋と天目台）
 - 下ノ重 薬籠盆二置

史料 2

「公方様御元服付而御成」 永禄 11 年（1568）4 月 21 日

・御杵形の御座敷の飾り

「押板」 唐絵三幅一対（本尊円相観音 馬遠、脇鷹・猿猴 牧溪）、三具足（胡銅、卓に）

唐絵一幅（山水 牧溪）、花瓶（胡銅、卓に）

「棚」 茶筥・台、盆に、茶籠盆に湯瓶・茶筥（青磁）、食籠・香炉

「書院」 双花瓶（胡銅）

「厨子の欄」 勅筆和漢朗詠集 2 巻、春秋左氏伝 10 冊・文沈

「文台」 硯（蒔絵雁八橋）、文沈、引合 1 帖、杉原 1 帖、火取香合、長盆に

「台子の中」 茶湯

小壺（茶入）、建蓋、水さし（真の手桶）、柄杓立、水こぼし（建水）

釜、風炉、蓋置き、

「たんすの中」 建蓋 2（金銀）、同台 2、茶筥おき茶碗

主要参考文献

阿部能久 2006 「戦国期間東公方の研究」

五十川雄也 2016 「豊後府内・大友館の調査成果」『発掘調査成果でみる 16 世紀大名居館の諸相』

今谷 明 1992 「戦国大名と天皇」

大分市教委 2006 「府内の町 宗麟の栄華」

小野正敏 1994 「戦国期の館・屋敷の空間構造とその意識」『信濃』46 巻 - 3 号

小野正敏 1997 「戦国城下町の考古学」講談社選書メチエ 108

川上 貢 1968 「日本中世住宅の研究」

久留島典子 2001 「一揆と戦国大名」日本の歴史 13

斎藤英俊 1984 「会所の成立とその建築的特色」『茶道聚錦二』

佐々木健策 2009 「小田原北条氏の威信—文化の移入と創造」『東国の中世遺跡—遺跡と遺物の様相』

玉永光洋・坂本嘉弘 2009 「大友宗麟の戦国都市豊後府内」遺跡を学ぶ 56

中野豊任 1988 「祝儀・吉書・呪符—中世村落の祈りと呪術」

八戸市教委 1993 「根城本丸の発掘調査」

服部実喜 2008 「かわらけからみた北条氏の権力構造」『戦国大名北条氏』中世東国の世界 3

福井県教委 1979 「朝倉館の調査」朝倉氏遺跡発掘調査報告書 1

丸尾弘介 2016 「周防山口、大内氏館の調査成果」『発掘調査成果でみる 16 世紀大名居館の諸相』

脇田晴子 2003 「天皇と中世文化」



<平成20・21年度>

殿村遺跡第1次発掘調査（学校建設のための事前発掘調査）

<平成22年度>

殿村遺跡第2次発掘調査（殿村遺跡調査事業に係る発掘調査の開始）

殿村遺跡とその時代I

平成23年3月19日開催

講演「殿村遺跡とその時代—中世の山寺・山城・居館—」

講師 中井 均 氏

<平成23年度>

殿村遺跡第3次発掘調査

<平成24年度>

殿村遺跡第4次発掘調査・虚空蔵山城跡第2次発掘調査

殿村遺跡とその時代II

平成24年4月14日開催

講演「殿村遺跡とその時代—中世の整地と人々の暮らし—」

講師 中澤克昭 氏

殿村遺跡とその時代III

平成25年3月16日開催

講演「殿村遺跡とその時代—虚空蔵山城と中ノ陣城から見た戦国時代—」

講師 榎本正治 氏

<平成25年度>

殿村遺跡第5次発掘調査・虚空蔵山城跡第3次発掘調査

殿村遺跡とその時代IV

平成25年10月12日開催

講演「殿村遺跡とその時代—環境史から見た中世の景観—」

講師 辻 誠一郎 氏

<平成26年度>

殿村遺跡第6次発掘調査

殿村遺跡とその時代V

講演「殿村遺跡とその時代—中世遺跡の整備・活用—」

講師 水澤幸一 氏

<平成27年度>

殿村遺跡第7次発掘調査

殿村遺跡とその時代VI

講演「殿村遺跡とその時代—発掘された武家の権威と文化—」

講師 小野正敏 氏

殿村遺跡とその時代VI

—平成27年度発掘報告会・講演会の記録—

発行日 平成29年3月31日

発行者 松本市教育委員会

〒390-8620

長野県松本市丸の内3番7号

印刷 精美堂印刷株式会社
